

私の記憶の中で、今でもひととき鮮明に残っているのは、幼少期に家族で訪れた下関の水族館での出来事だ。まだ幼かった私は、とっておきの時に着ようとしてしまっていた可愛いワンピースを身にまとい、精一杯のおしゃれをして車に揺られながら、どんな魚が見られるだろう、どんな生き物がいるだろうという期待と喜びで胸を膨らませていた。

そしてようやく到着した水族館。まだ朝も早い時間だったこともあり、施設内はやけに静けさに包まれていた。すると、突然視界の端に「茄子」が現れたのである。無視できないような存在感を放つ、頭から腰まで覆う大きい紫色の体とそこから伸びた腕と脚には長袖の黒タイツを纏っている。頭には帽子の如く明るい緑色のへたが乗っている。所謂、「茄子の着ぐるみ」がそこには立っていた。水族館に茄子。この世に魚や海に関係した着ぐるみは数多あるであろうに、よりもよって水族館に茄子。その組み合わせのアンバランスさに、幼いながらに私は強い違和感を覚えた。そしてその茄子と母を交互に見ながら目の前の状況が現実だと思えず、何度も「あれ、茄子だよな」と小声で確認した。母は声を出さずに私が聞くたびしっかりと頷いた。

水族館に茄子というインパクトに気を取られていたが、もしかしたらこれは何かのプロモーションなのかもしれない。そう思った私は茄子の周囲を見回した。しかし、周囲にはスタッフらしい人もカメラマンも茄子の仲間と思われる野菜もいない。私が認識できたのは、その茄子がそれがいつもの普段着であるかのように堂々と腕を組み、大きい魚が泳いでいる水槽を興味深そうに真剣な眼差しで観賞しているということだけである。むしろ、その事実が分かったことは私をより一層不安にさせた。そしてその不安は「この茄子が見えているのは、実は私たち家族だけなのではないか」。それは得体の知れない恐怖感となり、私は茄子から逃げるようにその水槽を後にした。

結局、その日は最後まで茄子に遭遇することはなかった。しかし、たとえ出会ったのが一瞬であっても茄子が私に残した強烈なインパクトは大きかった。私は目の前の水槽の中で伸び伸びと泳ぐ魚たちより、あの茄子がまた現れるのではないかという不安で頭がいっぱいになっていた。私は足早に水槽から水槽へと移動しながらも、視界の端、ガラスの反射、柱の影、あらゆる場所に意識を向けていた。少しでも気を抜けば、あの茄子がどこからともなくぬっと現れるのではないか。私はその緊張感から、母と繋いでいた手にはいつも以上に力が入っていた。

エッセイを書くにあたり、家族にこの出来事について聞いた。家族と懐かしい思い出で盛り上がる中、私は母の発した一言に衝撃を受けることになる。「あの日って、確かハロウィンの時期だったよね。」長年得体の知れなかった茄子の正体が意

外な形で解決されるとともに、一瞬にして「水族館の茄子」は「茄子の仮装で水族館に来た人」という存在に姿を変えてしまった。

しかし、それと同時に新たな疑問が浮かんできた。彼は一体どうやって茄子の着ぐるみでそこまで来たのだろうか。まさかその格好で水族館まで車を運転してきたのだろうか。そして水族館の展示コーナーにいるということは入場口もその格好で通ったのだろうか。職員は止めなかったのだろうか。鞆などを持っていたぶりはなかったが、そもそもチケットをどうやって買ったのだろうか。などさまざまな疑問が次々と浮かんでくる。

後日、その時水族館で撮ったという写真を見せられた。そこには、ポップなカボチャの装飾の前でお気に入りのワンピースを着た私と弟が写っていた。なぜか二人とも頭にはフグの被り物をして明らかに茄子に怯えている表情をしている。そこに茄子の姿はないが、私はその写真を見るたびに水族館での記憶を思い出すだろう。